写真版

穴銭 収集の手引き（三〇）

光華 椿井琢光

訂正 同治重寳 宝源局当十銭 二月号の一Aとその他の修正

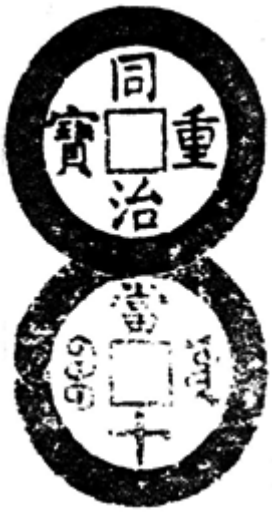
二月号に掲載した表題の分類について、銭種の認定や拓本の配置を間違えました。ここに御詫びをして、訂正させていただくので、御一読を御願い申しあげます。

それは最初の仮称・狭同銭（一A）についてです。塙史郎氏の「清朝銭基本分類資料集」に掲載されていた「東亜泉志拓本」の様銭と「仮称・狭同」が一致すると紹介いたしました。銭友から「違うのでは？」というアドバイスをいただき、先師より銭種の認定には「三カ所の一致点が必要」という事を思い出して再確認をした処、確かに相違点があり鑑別を間違った点と解説を掲載し、「仮称・狭同」の名称を抹消させていただきます。大型銭で紹介しようと企画したが尓寳が不鮮明で、母銭拓本の使用で解決いたしました。

1 缶寳八貝寳

同字二画が右肩上がりで下部が狭い。治のサンズイがまっすぐで、寳冠が右下がりで缶字が小さい。銭径はかなり大きい。

東亜泉志・拓本　拓本１Ａ



2 缶寳八貝寳

旧廠の第一局で銭径は大きいが前掲より軽い。金質は良く練れていて、**万選銭**と推定。類品を確認しているが稀少品と思う。

35.20mm － 13.41g　拓本２Ａ

同治重寳 宝源局当十銭の評価と存在数

今回の分類で判った事は銭径三四粍以上の大型銭は極端に少なく、評価は高い。その中でも、旧廠・第二局の三Ａ・缶寳ス貝寳の大型銭は最高級の稀少品で、三Ｂの三三粍台の大きさのものでも稀少品である。次に二月号掲載の四Ａ・尓寳ハ貝寳の尓画が拓本では明確に見えないので、小型だが母銭拓本の尓画が確実に見えるので、これを掲載する事で解決した。尓寳は宝源局・新廠の書式で、「新銭編年譜」でも全体に小型であるので尓画鮮明を優先する。ある意味、尓画鮮明・三四粍台の大型銭は特別な稀少品である。五Ａ・新廠第二局・尓寳ス貝寳は母銭を掲載。これは同字の一画・二画が繋がっている。これには治字のサンズイ二画が繋がった四Ｂ・「草水」がある。この局は存在数が多い。

① 缶八貝寳

同字は似ているが寳冠は直線、缶字が大きく、広貝で、背の満寳も右に傾く。銭径は大きく、旧廠第一局の特別銭と推定する。稀少品。

35.43mm － 14.37g　拓本１Ｂ

② 缶八貝寳

缶画が明確な母銭拓本が出てきたので掲載する。計測値の表示をできないが、小型制銭の母銭である。同治当十の母銭は稀少品。

旧蔵の母銭拓本　拓本２Ｂ